

とみせうたき 豊見瀬御嶽

豊見瀬御嶽は豊見城グスク内にある御嶽のことをいい神名コハナリノオイベといひます。

戦前はアーチ状の門構えで、入口は木戸で造られていました。そこは「ティミスノウチ」と言われ、中に入るのは豊見城ノロとお供をするビンシー持ちの二人だけが入る事が許されており、入口で草履ぞうりを脱いで入っていたと言われます。現在は地域住民によって整備され近代的な建物になっています。

『琉球国由来記』『琉球国旧記』にはハーリーと雨乞いの祭祀の際は同御嶽に参拝すると記述されています。毎年旧5月4日に那覇、泊、久米村によって行なわれるハーリーの際にはハーリー船で豊見城グスクの漫湖に浮かぶ小島のチーヤに船を漕ぎいれ、グスク内の御嶽に拝礼したといわれ、ハーリー歌にも「豊見城上て」と歌われています。当日は豊見城の4集落(豊見城、真玉橋、嘉数、根差部)は供え物を持ち寄って参拝し、豊見城御殿からもカゴや人力車でやってきてお供え物をし、ハーリーシンカ(漕ぎて)にふるまわれたといひます。また、干ばつの時は那覇の王府役人等と雨乞いの儀式を行っていました。豊見瀬御嶽への参拝は豊見城グスクが火攻めによって落城したといわれることから、丙ひのえの日は避けて参拝します。

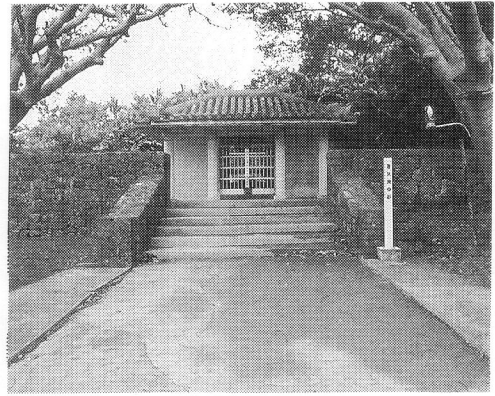
チーヤ(津屋)

豊見城グスクの眼下、漫湖の南西側にある琉球石灰岩の小さな浮き島がチーヤで、別名カーミーモーとも言われます。読谷村の都屋(方言ではトゥヤー)と由来を同じくする「海辺の倉庫である苫屋」にちなむものと思われます。

チーヤは14~15世紀頃豊見城グスクを築き、後に南山王となった汪応祖が支配した港と考えられそこを拠点として勢力を拡大していったものと思われます。また、近世以降に那覇が栄え、漫湖の水上交通が盛んになると町と農村部をつなぐ船着き場として賑わっていたともいわれています。

那覇ハーリーのゆかりの地でもあり、かつての那覇三村のハーリーは漫湖口(那覇港側)からチーヤに向けて御願パーリーを行ない、チーヤに到着すると豊見城グスク内の豊見瀬御嶽に参拝したといひます。

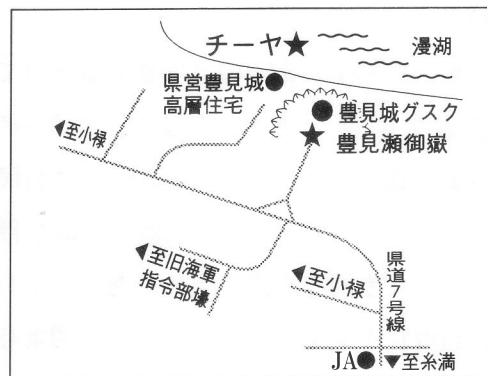
現在、チーヤ帯は周辺の埋め立て等により環境が変化して泥海になっており、周辺にはマングローブが植栽されたためにチーヤの全体形がわかりにくくなっています



豊見瀬御嶽



マングローブが植栽される前のチーヤ



豊見瀬御嶽及びチーヤの位置図